



中山靖子公開レッスン誌上紹介

ブルグミュラーによる

去る6月10日(月)夜、渋谷カワイサロンに於て、中山靖子先生によるピアノ奏法系統的研究第二回公開講座が開催された。

当口はたいへんな雨にもかかわらず、大勢の参加者が集り、楽譜を手に熱心に聴講していた。中山先生が、弾かれた数々の模範演奏は、子供と同じ条件で、ベタルなしで弾かれたにもかかわらず、誠に鮮やかな演奏であった。次に、その時の模様をお伝えしよう。

毎月おこなっている、ピアノ演奏の系統研究での、一公開レッスンは、主はタッチの問題を取り上げています。それで今度もそれらの事を含んだ曲を取り上げてみました。

2番(アラベスク)

この曲は左手はスタッカート、右手は五指運動の基礎的な形が出ています。レジェロー(軽やかに)になっていますが、それは左手、伴奏のスタッカートによっても現われます。右手スラーも単にスラーに弾くのではなく、スラーとスタッカートの中間程度と思つた方が良いでしょう。その事は第3関節の付け根の所から1音づつ押すという感じ(決して力を入れておさえるのではなくただ置くという程度)、第3関節のほぐれで弾く、その上リズムを良く感じて弾くという事になります。4小節目からの右手、3、4、5の指が弱い為にリズムが流れ勝ちです。それで指を良く上げるなどして、ゆっくりさらって下さい。又4小節目からクレッシェンド(だんだんつよく)になっています。しかし、ピアノの音の高い音程は響きにくい性質を持っていますのでその事を特に頭へ入れて弾く必要があります。逆に左手は響きやすいので、特に柔かに、弱く弾きましょう。左手のスタッカートはレジェローの感じを出す為に、手首の力を良く抜いて、良い手の構えであらかじめ、鍵盤に手をのせてはずみをつけるようにすると良いでしょう。

3番(まきばのうた)

この曲は、よくレガート(なめらかに)に弾くように心掛けましょう。レガート奏法は手首を柔らかかにして、指から次の指までの間をあげないようにする事です、又メロディの上がり、下がりによってニュアンスを付けるようにしましょう。この曲は3小節目の頭までが1つのフレーズ(句)になっています。それでP(弱く)で始まりメロディの上がりに応じてクレッシェンドします。2小節目の頭の音(D)にやや強いふくらみ(アクセントではない)になります。それぞれ、1つの小節全体を手

首の上下(1つ運動の動作)で弾くと特に柔らかなレガートの感じが出ます。16小節目のスタッカートは柔かく弾いて、少しだけ音が切れる程度に弾いてください。

4番(こどものあつまり)

この曲では3度のスタッカート、3度と6度のレガートが出て来ます。3度のスタッカートは2番の左手のスタッカートと同じように弾いて下さい。そして3度の上音(外声)は特に強く弾きます。8小節目の3度のレガートでもやはり上の音は強く、それにレガートがうまくいかない時は頭のC(D)、E(ミ)のCの音(3の指)をやや早めに上げるようにするとうまくいきます。10小節目右手スタッカートは手首をしっかり構えて肘からの運動(毬つきの感じ)で、それにメロディの上昇に伴ないクレッシェンドになっていますから、よく守りましょう。スタッカートを強く弾く時、肘からの上下の運動が大きくなるだけで、楽にして力まないように弾いて下さい。13小節目からの5度のレガートは、A(ラ)・F(ファ)(1・5の指)、G(ソ)E(ミ)(2・5の指)、F・D(1・5の指)になっていますがむづかしい場合は1・5の指のままでもかまいません。その時A(ラ)・F(ファ)を弾いたあとで腕の力を抜いて、手首を上げてレガートにずり動かすように弾く事が大切です。それで上の音を良く出す事(特に1の指の音が強くなりやすいので)も気をつけて下さい。

7番(きよい流れ)

右手3連符の頭の音は4分音符で1の指になっているので強くなりがちです。それに右手四分音符はメロディと断定するには重い感じであり適当ではありません。メロディとしては3連符の真中の高い音(G・G・A・Fis)(トイ嬰へ)の方が適当です。(しかしこの曲全体がピアノニッシモですから強過ぎないようにして下さい)9小節目後半からも、右手3連符の真中の音を良く出して左手は美しいレガートでうたいます。右手3連符の終りの音は最も小さく弾いて下さい。

10番（やさしい花）

これは2音がスラーで結ばれスタッカートで切るようになっていきます。しかし普通のスタッカートのような突きはなす感じではなくて鍵盤にさわったら、手首をやわらかにしてぱつと上げる感じで弾いて下さい。

13番（なぐさめ）

7小節目まで前奏の形になっています。はじめ右手は4・5、3・4の指のトリラーに近い形になっていますがたとえ前奏でも、レガートに歌うという事を考えて下さい。小節の頭の和音はそれほど深い意味をもっていません。P（弱く）で弾きます。8小節目からは右手に4分音符でメロディが出てきます。ここでは右手G（ソ）の音（1の指）を小さく弾く事が重要です、その為にまず右手メロディだけを取りだして良くつながるようにさらいます。そのあと、メロディが切れないように、メロディのじやまにならないようにGの音（1の指）を小さく入れる練習をします。その時手首を高くして、手の力を抜いて（オバケの感じ）、メロディにあたる指に重みをかけ、1の指は軽くするようにして下さい。

19番（アベ・マリア）

この曲は「お祈りのように」と言い訳ですから、オルガンの音を感じて下さい。それで、和音の上の音をメロディとして聞かせる、指が次の音に移る前に腕の力を抜いて、レガートに弾くという事をいつも頭において下さい。25小節目から26小節目にかけて、左手の4分音符がメロディになっています。終りの音はフェルマータで終わっていますが、その場合前の音は、特に発想記号がない場合でも *ritenuto*（その部分から平均に遅く）します。

21番（天使の合唱）

この曲は両手を交互に使ってつのグループを作っています。1小節4拍目の4分音符は強くなり過ぎないように気を付けて下さい。3小節目の右手3連符の終りの音G（ト）C（ハ）が強くなり過ぎないようにレガートに弾きましょう。3小節から4小節目又は9小節目からだんだん強くなっています。しかしそこでのメロディと言えば、2拍目と3拍目の頭の音（右手3連符の頭の音）です。それでだんだん強くなってもメロディが出てくるように他の音がじゃまにならないように弾いて下さい。13小節目にも *Cresc.*（だんだん強く）になっていますがここでは左手のA・H・C・Hと右手八分音符のあとのC・H・A・Hが対旋律になっているのでその事を感じて弾いて下さい（しかしあくまでもレガートの内ですから強すぎないように気を付けて下さい）。

23番（かえりみち）

この曲はスタッカートの為の曲です。このスタッカートはいくらか手首を上げて、柔らかにして手首から弾くと良いでしょう。喜び勇んで帰る曲ですから全体に軽い感

じで弾きましょう。9小節目から右上の音がメロディになっています。（5・4の弱い指が使われていますからきれいに揃うようにさらして下さい。17小節目から左手にメロディがきています。しかし右手の和音の変化のおもしろさもよく聞きながら弾きましょう。

25番（貴婦人の乗馬）

この曲では今までのスタッカート、レガートの組み合わせられた形、音階、和音などが出てきます。最初のスタッカートは蹄の音です。前にも話しましたが鍵盤のそばからはずみをつけその反動で、はねるように弾いて下さい。9小節目のレガートでは、今までのスタッカートでまっすぐになっていた手首を意識してゆるめて弾くようにするとうまくいきます、同じ事が17小節目の右手にも言えます。17小節目の左手全音符が早く切れないように又4拍目の四分音符は強くなり過ぎないように、全音符と同時に、より短めに切れるように弾きましょう。終りから3小節からの和音はf（強く）ですけれど手首がかたくならないように、たたいたあと腕が上がる程度に身体を楽にして弾きましょう。

ピアノレッスン受講生募集

レッスン料 無料

8月30日（金）A.M. 10.30

カバレフスキー子供の曲より

9月9日（月）P.M. 6.30

ソナチネアルバム 1巻より、4番、12番、23番

10月14日（月）P.M. 6.30

バッハ／インベンション

2声 1番、8番、13番、15番

3声 1番、12番

11月11日（月）P.M. 6.30

ツェルニイ40番

1番、3番、8番、19番、31番、38番

ツェルニイ50番

5番、10番、14番、40番、49番

お早めに〈東音〉事務局へお申し込みください。

第13回〈東音〉 ピアノゼミナール誌上紹介

ピアノタッチの問題点

あたらしい子どものソナチネ（中山靖子編）による中山靖子公開レッスン

ピアノ奏法系統的研究とは別に、中山靖子氏を迎えての第13回〈東音〉ピアノゼミナールは、新しい教材でピアノタッチの問題を検討した。ピアノ奏法を系統的に指導されている中山靖子氏ならではの細かな御指導で、受講者、参加者一同に示唆を与えた。当日は、受講者の都合で、5番、8番、3番の順で公開レッスンがなされたが、誌上には、3、5、8番の順で紹介しよう。



3番 ベートーベン作曲 （ハ長調 ¾拍子）

この曲は別に1楽章があって2楽章のつもりで書かれた曲だと思います。それで割合ゆっくり弾いて良い曲です。良く歌うという事をまず考えましょう。左手伴奏はもちろん控えますけれど、ベートーベンの曲ですからモーツァルトと違って頭の

Fの音、8分音符程度にのぼしてもかまいません。1の指（Cの音）は強くなりすぎないように、特に小さめに弾いて下さい。4小節3拍目から別のメロディが出てきます。6小節の右手2拍目の指使いですが、この本ではベートーベン自筆のもの（4・3・1・3）を使っていますが、弾きにくい場合は3（D）2（C）1（H）3（B）に変えてもよろしいです。12小節左手3拍目からのCのスタッカートの音はつなぎの役目ですから弱めに弾いて下さい。15小節目にカッコして Pocariten. と書いていますが、好みによって付けて結構です。22小節1拍目の音、フレーズの終りで、和音の面からも解決になっていますから落ちついた小さな音になります。28小節からの右手3度や4度などか出て来ますが、やはり外音（高い音）をよく出して弾く事です。29小節目の32分音符に指使いを書いていませんが2（A）・3（B）・5（C）・3（B）にすると弾きやすいでしょう。次の楽章は3度の音でレガートに弾く事がむづかしい所です。16小節目休符があるのに上カスラーがかかっています。これはレガートと言うよりフレーズがまだ纏いているという事を頭に入れて弾いて下さい。

5番 モーツァルト作曲（ト長調 ¾拍子）

モーツァルトの曲では細かいフレーズもよく守って弾きましょう。1小節目右手スラーの終りの音は軽く切っ

弾いて下さい。9小節目からの左手の伴奏で3拍目の音（H・D）や6拍目の音（C・D）が残ら勝ちです。1拍目、4拍目の付点4分音符よりあとに残らないように早めに切して下さい。モーツァルトの曲においてはメロディに対して伴奏は特にひかえめに弾きます。表情記号にしてもベートーベンの〈f〉はモーツァルトでは〈mf〉程度に考えて良いと思います。21小節目からの左手の伴奏も手首を高くして力を良く抜いて（オバケの感じに）特別に弾くという感じより普通にさわる程度の小さな音で結構です。同じ21小節目左手の Cis（3の指）.E（1）D（2）、F（1）鍵盤に触れる程度に上げて弾くとやわらかい音が出ます。37小節目から曲の感じが変わります。同じ37小節目からの右手1小節目と4拍目のスタッカートはフレーズの終りですが、拍子の頭になっていますから、指で鍵盤をはじき返すように、腕の力を抜いて弾くと良いでしょう。47小節目から mor になっているので、意識して〈P〉で弾いて下さい。モーツァルトの曲はテンポもよくまもって、リズムカルに弾く事も大切です。

8番 ハイドン作曲（ハ長調 ¾拍子）

右手頭のアフタクトから2小節2拍目の頭までが1つの話かけで、そのあとから4小節目までがそれに対する受け答えにあたると言えます。それで頭のアフタクトは1つの音だけ別個にならないようにして下さい。話しかけの部分はスタッカートも多く、メロディも上がっていていますから、クレッシェンドで元気な感じになります。それに対して受け答えの所はメロディが下降してレガートになっています。左手9小節目の5度（G・D）の連続は、5の指（G）と1の指（D）のかまえをしっかりし、肘からの運動（毬つき運動）ではずみをつけてかわいらしく弾いて下さい。16小節2拍目からの左手1の指（D）はひかえ目に5の指の音を強めに弾いて下さい。21小節目の左手、スタッカートとレガートの両方が付いていますが柔かく音を切る程度でディミヌエンドになります。同じ小節目の右手休符はハイドン、モーツァル

トの曲ではよく守って下さい。28小節目から31小節目にかけて〈f〉から〈P〉になっています。その場合メロディはもちろんですが、伴奏の場合はメロディ以上に極端に〈f〉と〈P〉の差をつけて弾くとより美しい演奏になります。メヌエットはワルツと同じ3拍子ですがゆったりしたテンポで弾かれます。4小節目までが1つのフレーズになっていますが、その中の小さなスラーもこまかく切って下さい。3小節目までメロディが上がっていますからクレッシェンドになり4小節目でディミヌェンドになります。5小節目の左手4分休符は手を上げてはきり切りましょう。Trioの部分からCmorになっているのでいくらか暗い感じで弾きます。しかしハイドン、モーツァルトの曲では、暗い感じと言っても、じめじめした感じにならないようにしましょう。左手頭の5の指(Cの音)はいっぱいまでおさえて弾きましょう。

8番3楽章(フィナーレ)

2小節目のトリルはむづかしい場合は3連符を使っても結構です。(A・G・A・G・F・G)、1小節目からのスタッカートはハイドン、モーツァルトなど古典の曲に多く見られる伴奏形ですが、スタッカートと言っても鋭くはねる感じではなく、押して切ると言った方が適当なほどです。右手は1拍目のスタッカートが、2拍目にはレガートになっていますから、手首を柔らかかにして、

メロディが上昇していますから、もちろん Cresc. になります。15小節目からの左手、別にスタッカートになっていませんが、スタッカートでもレガートでも良い所です。32小節目からの右手16分音符は高い音の方がメロディになっていますからその音を良く出すように弾きましょう。46小節目からも右手の高い方の音がいくらかメロディ的ですから、その事を意識して弾きましょう。65小節目と66小節目と同じ形が出て来ますが、〈f〉と〈P〉で区別するやり方は、ハイドンなどの古典にはよく見られます。(それでも〈f〉の所を乱暴にたたかないように)ハイドン、モーツァルトの曲は〈ff〉といってもベートーベン、ブラームス程大な音にする必要はありません。しかし終りの11小節目前からは、気持の上では〈f〉に持っていく感じで弾く必要があります。5小節目からの右手は前と同じように高い音が聞えるように弾きます

(小供のソナチネ)はソナチネ・アルバムの一巻、二巻のいくつかの曲を終えた程度の方がソナタなどに進む前に、力をつける為に利用できる本です。

その他、数々の質問に一つ一ついねいに答えられ、参加者一同が去りがたい雰囲気の内には終了した。
(波)

わたしたちの 音楽 8月号 予告

増頁断行、今迄の8頁より16頁へ

随筆、木下 保 他

オルガンの歴史 吉田 実

第14回〈東音〉ピアノセミナー誌上紹介

第3回ピアノ奏法系統的的研究・中山靖子公開レッスン

誌上紹介

音楽大学受験曲比較

バイエルはどの版がよいか。結末編

わたしの指導法

会員紹介、レコード評、〈東音〉ニュースなど

購読希望の方は、1年分送料共1,000円をそえて下記へ

ホットニュース、よい原稿がありましたら下記へお寄せ下さい。薄謝を呈します。

170 東京都豊島区巢鴨5-1149

東京音楽研究会 TEL (946) 4457

東京音楽研究会について

1966年5月「日本音楽」振興のために比較的演奏されない邦人作品の開発及び正しい演奏法、指導法などの研究を目的として発足しました。

組 織

研究局

指導者研究部 音楽の先生方の研究部

研 究 部 演奏家を目指す方々の部

指 導 部 幼稚園から高校迄の音楽を学ぶ方々の部、音楽教室

音楽進路相談部 音楽技能テスト音楽上の御相談に
応ずる部

事務局

公開レッスン部

マネージメント部

出 版 部